（若手技術者向け）フィールド参加型

「地域課題発見・解決力」養成研修会
成果報告書

～”長谷地区のあした”を提案する～

平成25年12月

柴北川を愛する会
（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

１．研修会の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

２．長谷地区を知る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

３．グループワークの進め方・・・・・・・・・・・・・・１２

４．長谷地区の課題は、目標は・・・・・・・・・・・・・１７

５．“長谷のあした”に向けて・・・・・・・・・・・・・２８

６．参加者の感想　その他・・・・・・・・・・・・・・・３４

はじめに

大分県南部の、とある山間地を流れる柴北川は、その川沿いにある長谷（ながたに）集落での人々の営みと深い関係を保ちながら、その暮らしに潤いと豊かさをもたらしてきました。

近年、集落の人々の暮らしぶりが変化したことに伴って、この川の環境の変容が目立ち始め、それを問題視した集落の人々自身による、川の浄化活動のための活動組織として、平成 18 年に「柴北川を愛する会」が結成されました。

同じ頃、（一社）建設コンサルタンツ協会では、近年の急激な社会変動下にあっても、楽しくかつ希望を持ちつつ地域の再生に取り組むことを企図して、市民からまちづくりの様々な夢アイデア提案を募り、その実現化を図るための活動を進めていました。

多数寄せられた夢アイデア提案の中で、“地域と都市とが共助により地域づくりを進める”という一提案に着目し、そのための活動組織として「九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（通称：共助研）」が結成されたのは、平成 20 年のことでした。

平成 21 年春に、偶然の出会いからこれら２つの組織は連携による地域づくり活動に取り組み始め、その後の４年間で当初の予想を超えるような活動を展開させました。

この間の活動を通して「柴北川を愛する会」は、環境保全の活動団体から、都市との交流活動の展開や地域資源の活用による新たな特産品の開発検討など、長谷集落全体の再生にも大きな役割を果たす団体へと変わっていきました。

一方の「共助研」も、長谷集落での活動を通して経験を積み、新たに他の地域での活動も展開するなかで、本来の建設コンサルタント業務だけでは得難い、地域に密着した支援技術を習得し、さらにその活動成果を情報発信できる組織へと変わっていきました。

（一社）建設コンサルタンツ協会では、刻々と変化していく社会ニーズに対して、建設コンサルタントが自律的にかつ積極的に対応していくことが重要と考えています。

そのための建設コンサルタント技術者育成の取り組みとして、この長谷集落をフィールドに現地の自然を巡り、現地の声を聞き、現地の人々とひざを交えながらの、「地域課題発見・解決力」養成に向けた若手技術者向け研修会を企画しました。

おりから、長谷集落の再生に向けて、新たな取り組みの必要性を痛感していた「柴北川を愛する会」でも、この研修会への地元住民の参加を通してその方向性を探ることが重要と考えて、研修会の開催に共同で取り組むこととしました。

こうして、「柴北川を愛する会」と（一社）建設コンサルタンツ協会内の「共助研」との連携によりこの研修会が運営され、両会のメンバーと共に、若手技術者がＰＣＭ手法を活用して長谷集落の問題分析・プロジェクト検討の作業を行いました。

２日間の研修会作業により提案されたプロジェクトの数々が、長谷集落のより良い明日を築く足掛かりとして、また建設コンサルタント若手技術者自身の技術力養成の成果として今後多くの局面で役立つようになることが、研修会を運営した両会の強い願いです。

柴北川を愛する会
会長　穴見純一

（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部内
九州 郷づくり共助ネットワーク研究会
会長　針貝武紀

４マス自己紹介によるアイスブレーク

３チームに分かれてのグループワーク

若手技術者による成果発表

1　研修会の概要

（１）研修会の背景と目的

●自律した建設コンサルタントへ

建設コンサルタント協会においては、これからの建設コンサルタントのあるべき姿として「社会資本整備をリードする自律した建設コンサルタント（自律した産業、自律した技術者）」という基本的方向性を定めようとしています。このためには、私達、建設コンサルタントは、それぞれの専門技術を核としながら、変化していく社会ニーズに対して積極的に対応していくことが強く求められています。

一方、これまでを振り返れば、計画系業務に携わっている一部の技術者を除いては、一般市民と建設コンサルタント技術者が触れ合う機会は乏しく、直接、ニーズを聴いたり、解決策を提示するような経験が乏しいというのが現実ではないでしょうか。

建設コンサルタンツ協会九州支部の夢・アイデア部会の中の「九州郷づくり共助ネットワーク研究会（以後、共助研と略す）」では、平成２０年度より、大分県豊後大野市の任意団体「柴北川を愛する会（以後、愛する会と略す）」との協働で、大野川支流の柴北川流域：長谷地区の地域活性化のお手伝いをさせて頂いております。その縁で直接、地域の方々とのネットワークを築くことができています。

この地域でも、高齢化が進行し、持続的な地域社会の維持のためには、地域活性化、産業育成、インフラの老朽化対策、防災・減災、景観保全・向上、環境保全、等々、様々な課題があります。

そこで、共助研メンバーが仲介役となりながら、地域の将来像について、若手技術者と地域の方々との意見交換の機会を企画することと致しました。

●長谷地区の活性化に向けた新たな取り組みへ

平成 18 年に組織化して以降、少しずつ活動の場を広げてきた「柴北川を愛する会」も今年で結成後８年目を迎えました。

この間の活動は、地域内を流れる柴北川の清掃や県道沿いの花いっぱい活動など、もっぱら地域の環境整備に力を注いできましたが、平成 21 年に共助研と共に「山村再生プラン事業」への取り組みを始めてから、長谷地区が抱える様々な地域課題にも目を向けることとなり、その活動を通して地区内の多くの住民にも愛する会の存在に関心をもってもらえるようになってきました。

しかしながら、地区内には、既に自治会や民生委員、社会福祉協議会などの多様な組織が活動しており、愛する会の活動との接点が多いのにも関わらず、必ずしもそれらの活動との協力や連携は進んでいないのが実状です。

その解決に向けて、長谷地区の今後を話し合える場が出来ないかと考えていましたが、時期をあわせたように、共助研からこの長谷地区をフィールドとする建設コンサルタント若手技術者の研修会開催の申し入れがあり、愛する会もその開催に協力することで地区のこれからを考える機会ができると判断しました。

●若手の成長と地域の再生の２つを目標として

この研修会は、若手技術者にとっては、長谷地区の方々と直接触れ合うことができ、自分の技術の社会的位置付けや将来像を考える良い機会となることを目標としました。

一方、長谷地区の方々にとっては、若い技術者から見た地域の現状・課題の提示、さらに将来像の提案が、今後の地域づくりにおいて多くの示唆を得る機会となることを目標としました。

シニア世代が多い共助研メンバーにとっては、この仲介役を果たすことで、長谷地区へ少しでも貢献するとともに、若手技術者の成長に資することができれば幸いと考えました。

（2）研修会開催に向けた準備活動

●年次総会における活動方針の検討（2013/5/13）

会創設後５年目を迎えて開催された共助研の年次総会において、建設コンサルタント協会による建コン自律化の支援として、当会としても若手技術者の育成に取り組むことが議論され、長年活動を続けている柴北川プロジェクトの一環として長谷地区をフィールドとする研修会の開催が検討されました。

●共助研における研修会素案の検討（2013/7/25）

年次総会における活動方針を受けて、共助研の事務局会議が開催され、研修会企画案が話し合われました。この際の基本的な考え方は以下の通りです。

> 今回は、九州の中山間地域の一例としての「大分県豊後大野市犬飼町長谷地区」というエリアを対象モデルとして、「この地域の生活環境全体の質の維持、向上」を大きな目的に掲げ、現地を視察し、住民の方々の声を聴き、意見交換しながら、この大きな目的へ向けて、社会資本整備・維持のあり方を議論して、今後、建設コンサルタント技術者がそれぞれの専門性を活かしながら、如何に地域社会へ貢献できるかを考え、提示してみようとの試みである。
>
> 議論の進め方としては、ワークショップ方式を基本として、共助研メンバーの経験・ノウハウや参加型計画手法として良く知られている「PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）」等を参考とし、大きな課題等を抽出・整理する。
>
> 課題解決策（案）の提示段階においては、それぞれの専門技術の知見も織り込み提示する。

研修会対象者は建コン協会所属会社の若手技術者 10 名程度とし、木寺会員を共助研側の実行委員長とする実行体制も決定しました。

●合同会議による実施の決定（2013/9/4）

研修会開催に関する愛する会と共助研の合同の会議を開催しました。愛する会では、この少し前に役員会が開催され受け入れの方向は定まっていましたが、その具体的な内容を確認したこの会議を受けて正式に決定しました。

この会議において、開催日を 11 月中旬の２日間、会場を三ノ岳なかよしパーク研修センターとすることが決まりました。また、愛する会側の実行委員長を穴見会長に勤めていただくこととし、両会の合同による実行委員会体制を発足させました。

●実行委員会第１回の開催（2013/10/7）

共助研側による実行委員会を福岡で開催し、ＰＣＭ手法の確認及び研修プログラム（案）の検討を行いました。この後、ＣＰＤプログラムの申請を行い承認されました。

●実行委員会第２回（合同会議）及び会場確認（2013/10/20）

柴北川プロジェクトとしての稲刈り・収穫祭の開催に合わせて、両会による合同会議を行い、プログラム等の確認及び研修会会場の下見等を行いました。

●実行委員会第３回の開催（2013/11/7）

研修会実施前の最終委員会を福岡で開催し、ＰＣＭ手法による検討の模擬演習を行うとともに、検討テーマに関する協議を行いました。

本番の 10 日前でしたが、研修参加の応募者が少なかったため、改めて共助研会員の関係会社や建コン協会を通して参加の働きかけを行うことを確認しました。その結果、最終的に４名の参加が確保でき、予定通り開催することとしました。

（3）研修会プログラム

11 月 15 日・16 日の２日間をわたって開催された研修会の全体プログラムは以下の通りです。なお、このプログラムは、研修会参加の若手技術者向けに編集されたものです。

■　**全体プログラム**

初日　11月15日(金)		
１０：００ １３：００	建コン協会ビル前集合・出発 途中、昼食 長谷着（旧長谷小学校）	
１３：３０	研修会開始 ・開会あいさつ ・参加者紹介（４マス自己紹介） ・地域概要紹介　等	旧長谷小体育館にて
１４：１０ １５：４０	現地（フィールド）調査開始 三ノ岳なかよしパーク着	地区内を車で視察
１６：００ １８：００	グループワーク（ステージ①問題分析） ・チーム分け/中心問題設定/問題分析 ステージ①終了	３チーム編成
 １８：４５ ２１：００	（休憩・入浴・懇親会準備等） 懇親会開始 懇親会終了	 地元の方々との交流 管理研修センター泊

2日目　11月16日(土)		
７：００ ７：３０	全員起床 朝食	
８：３０ １０：３０ １１：４５	グループワーク（ステージ②目的分析） ・目的分析討議 （休憩） ・プロジェクト検討討議 ステージ②終了	
１２：００	昼食	
１２：４５ １４：００	全体ワーク（ステージ③成果発表） ・各チーム 10～15 分 ・講評 研修会終了	
１４：３０ １７：３０	三ノ岳なかよしパーク発 建コン協会ビル前着・解散	

（4）研修会参加者他

研修会参加者等は、以下の通りです。
３つのチームに分かれて研修をおこないました。

●チームA：地域生活の維持（少子高齢化・伝統文化・地域コミュニティなど）検討チーム

若手技術者	徳留　康憲	西日本技術開発（株）
若手技術者	高橋　真大	（株）福山コンサルタント
長谷地区	田嶋　栄一	長谷地域総合開発促進協議会会長
長谷地区	平石　由美子	長谷地域総合開発促進協議会
シニア技術者	玉田　孝二	共助研
シニア技術者	波木　健一	共助研

●チームB：環境保全・向上（里山環境・農村風景・鳥獣被害など）検討チーム

若手技術者	藤塚　恭平	西日本技術開発（株）
長谷地区	赤峰　映洋	柴北川を愛する会
長谷地区	大塚　勝枝	柴北川を愛する会
長谷地区	甲斐　正俊	大野川漁協長谷支部長
長谷地区	三浦　君重	柴北川を愛する会
シニア技術者	木寺　佐和記	共助研
シニア技術者	森脇　亨	共助研

●チームC：安全・安心（自然災害・高齢者福祉・医療など）検討チーム

若手技術者	濱﨑　瑛貴	（株）福山コンサルタント
長谷地区	甲斐　能美	柴北川を愛する会
長谷地区	高柳　美子	柴北川を愛する会
長谷地区	渡邊　雪法	柴北川を愛する会
シニア技術者	波多野　健志	共助研
シニア技術者	矢ケ部　輝明	共助研

●その他参加者

ワーク参加（２日目）	橋本　祐輔	豊後大野市市長
ワーク参加（１日目）	堀　克則	豊後大野市総務課
現地調査参加	穴見　純一	柴北川を愛する会
現地調査参加	安藤　恒美	柴北川を愛する会

（以上敬称略、順不同）

2　長谷地区を知る

（1）長谷地区の概要

研修会開始にあたり、長谷地区の概要が紹介され、この紹介後、若手技術者は地元の郷土史家（安藤恒美氏）の解説を聞きながら、長谷地区全域を車で視察しました。

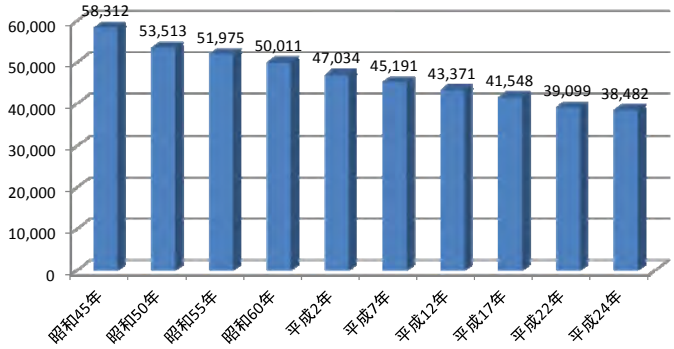
以下に、地区概要説明で使用されたパワーポイントを紹介します。

※資料中、インターネットの地図サイトから地図データを引用した頁については削除しています。

豊後大野市観光協会作成

豊後大野市の人口動向

豊後大野市（に該当する地域）の人口推移



●人口　38,482人（平成24年）
　大分県全体の3．3%

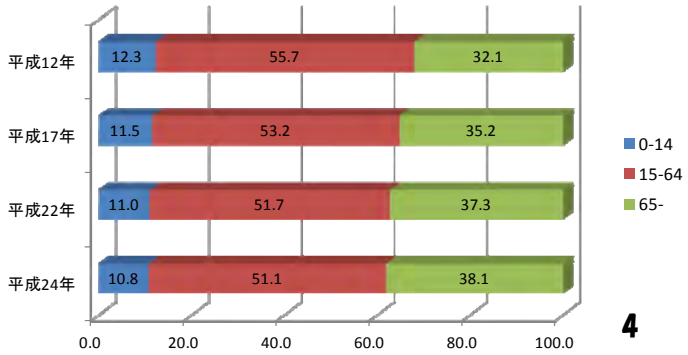
●人口動向
　高度経済成長期頃から、人口減少が継続。
　平成45年当時の2/3の人口に。
　合併後の7年間で、約3千人減少。

●高齢化率　38．1%（平成24年）

●高齢化率は、県内市町村で2番目の高さ
　平成22年（2010年）の高齢化率37.3%は
　県全体（26.6%）より10.7ポイント高い。
　（県内一はお隣の竹田市　40.8%）

●少子化も進む　10．8%（平成24年）
　県全体は13.1%（平成22年）

豊後大野市（に該当する地域）の年齢別人口構成の推移

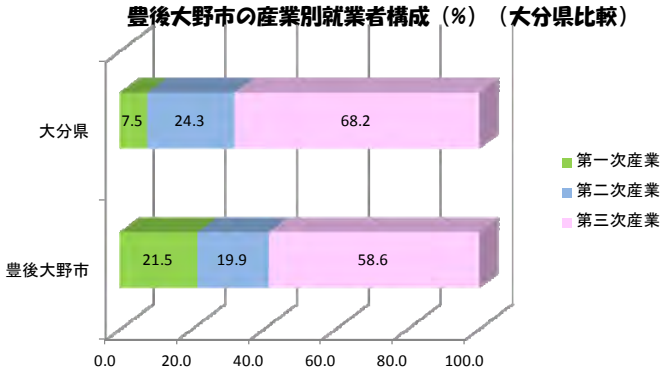


4

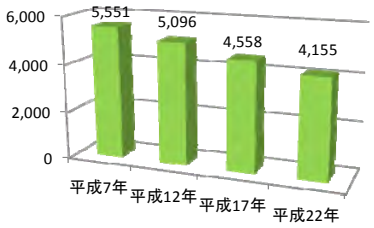
豊後大野市の産業等

●産業別就業者数の構成
　第一次産業就業者数の割合が高い。21.4%
　第一次産業就業者の数（3,849人）は、
　　竹田市、大分市に次いで県内3番目。

豊後大野市の産業別就業者構成（%）（大分県比較）



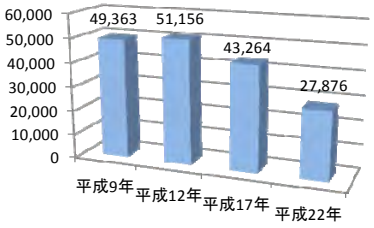
経営耕地面積（ha）



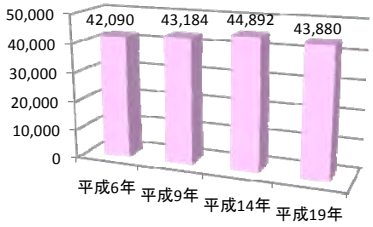
●経営耕地面積の推移
　年々減少しており、4,155ha。
　県全体の11.7%。
　7割が水田。

●工業出荷額の推移
　平成22年の27,873百万円は
　県全体の0．7%。
　食品加工の小規模工場が主。

製造品出荷額等（百万円）



商業年間販売額（百万円）



●商業販売額の推移
　平成22年の43,880百万円は
　県全体の1．7%。
　商店数は減少しており、585店。

5

長谷地区はどんなところ？

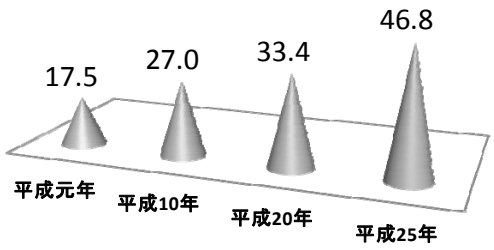
長谷地区は、
豊後大野市の東の玄関口
犬飼町にあって、
柴北川の中流域約10Kmに
沿って東西に細長く
形成された農村集落。

6

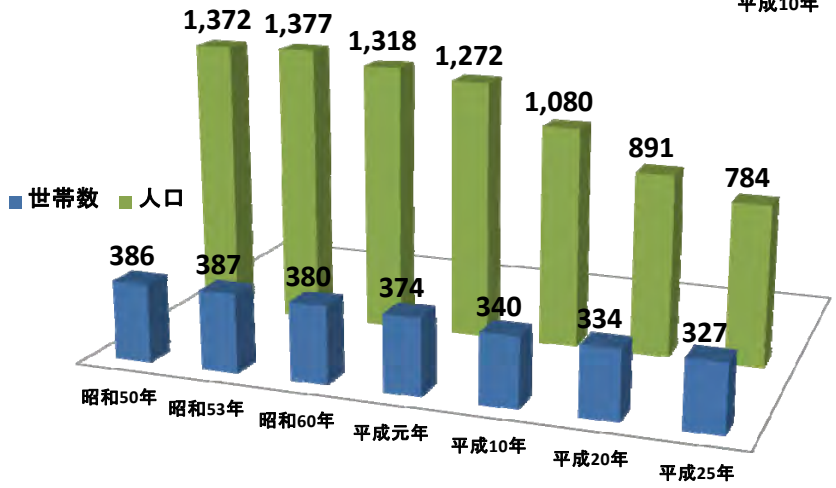
長谷地区の人口動向

●約40年で人口は半減。
　昭和50年（1975年）は、386世帯で1,372人。
　現在は43%減少して、784人（327世帯）。
●ここ数年で急激に高齢化
　平成以降、急激に高齢化が進行。
　46.8%は、豊後大野市全体より8.7ﾎﾟｲﾝﾄ高い。

長谷地区の高齢化率の推移（％）



長谷地区の人口・世帯数の推移



8

長谷地区の７つの行政区と人口・高齢化率

（平成25年3月末）

三ノ岳なかよしパーク

・長谷地区は７つの行政区で構成。
・全行政区で高齢化が進行。
　→最も上流部の長畑・山内行政区では、３人に２人が高齢者。
・平成6年から、長谷地区全体の地域整備を推進する地元組織として「長谷地域総合開発協議会」が設置されて、地区全体が一本に。

25年3月末現在

行政区名		世帯数	人口	高齢者数		高齢化率
				男	女	
長畑山内		47	99	31	31	62.6
	長畑	16	37	12	11	62.2
	山内	31	62	19	20	63.0
栗ヶ畑		53	134	22	37	44.1
黒松		80	179	34	51	47.5
高津原		57	141	26	45	50.3
	高津原	21	50	7	17	48.0
	山田	25	63	13	18	49.3
	畑ヶ川	11	28	6	10	57.2
柴北上		31	75	9	19	37.4
柴北下		48	131	22	28	38.2
葛川		11	25	4	8	48.0
合計		327	784	148	219	46.8

栗ヶ畑
【134人・44.1%】

黒松
【179人・47.5%】

旧長谷小学校

高津原
【141人・50.3%】

柴北上
【75人・37.4%】

長畑・山内
【99人・62.6%】

葛川
【25人・48.0%】

柴北下
【131人・38.2%】

9

長谷の歴史・文化財

柴北川に架かる石橋のひとつ
神宿橋（かんじゅくばし）

●戦国時代頃
　・栗ヶ畑地区にお城があり、キリシタンの城主がいた。
　・天正14年(1586年)、薩摩の島津軍が豊後に攻め入った時に、地区内にある栗ケ畑城も攻められ多くの婦女子が捕らえられたと宣教師・ジョイスフロイスの著書にある。
　・城主以下一族はキリシタンであったといい、城跡近くにキリシタン墓が今でも残されている。

●江戸時代
　・三ノ岳は山全体が修験者の道場であった。
　・金倉寺（きんそうじ）と言う寺があり、京都あたりからもお参りに。
　・柴北の両村橋上流まで舟が行き来。川岸には倉庫が沢山並んでいた。

　その他、地区内には歴史を物語る遺跡や、文化財が残されている。

大聖寺境内の五輪塔群八十八基

●昭和30年　合併により犬飼町となる。

●平成22年　長谷小学校が１２０年の歴史に幕
　・近代に入り、地区の中心地黒松地区にある長谷小学校を中心にまとまり栄えてきた。
　・ピーク時は455名もいた児童も12名となって、閉校。

旧長谷小学校

黒松阿蘇神社の石造鳥居
南北朝時代の造立と推定

10

長谷地区の伝統・風俗

●行政区単位の祭り

長谷地区は各行政区が神社を持っていて、
それぞれが4月と10月に祭りを開催している。
熊野神社（柴北上、下、高津原区）・葛川かつらがわ神社（葛川区）
阿蘇神社（黒松区）・祇園社（栗ヶ畑区）・山内神社（山内区）・長畑神社（長畑

●黒松阿蘇神社の祭り開催日

春祭り　　4月19日直前の日曜日
秋祭り　　10月19日直前の日曜日
＊本来は4月・10月の19日が開催日だが、神楽や獅子の舞手に
勤め人が多い関係で、10数年前から上記のように。

●神楽・獅子舞

神楽は黒松、獅子舞は柴北と黒松。
それぞれが自前で出来るが、他の自治区は
自前のものがなく、祭り当日は式典のみ。
遷宮等の年は神楽や獅子舞を呼び、盛大に。

11

長谷地区の住民意識

（“長谷地区のこれから”を話し合うグループヒアリングより）

●人口減少・高齢化により、地区活動が低下し、暮らしに不安を感じる。

・若い人が定着しない。働く場が無い、教育環境が整っていない、農業の継続が難しいなどの様々な原因が

・一人暮らしの高齢者も増加し、自治会活動が低迷。

・医療には不安。

●外からの移住に、重点的に取り組もう。

・近郊で働く若者に、移住してほしい。

・そのためには、空き家の斡旋や、地域の魅力を伝えることが大事。

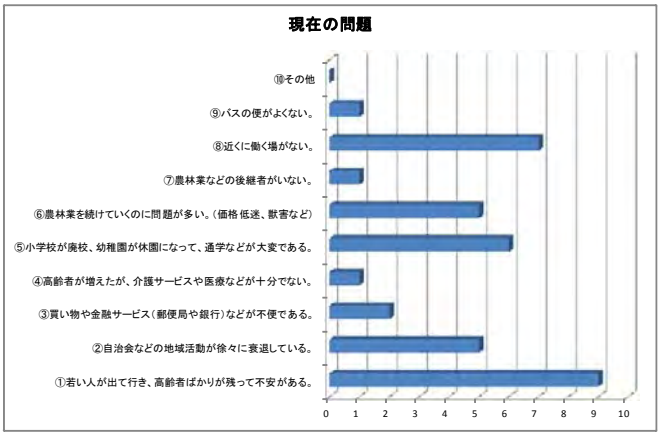
●長谷には様々なお宝がある。その活用を。

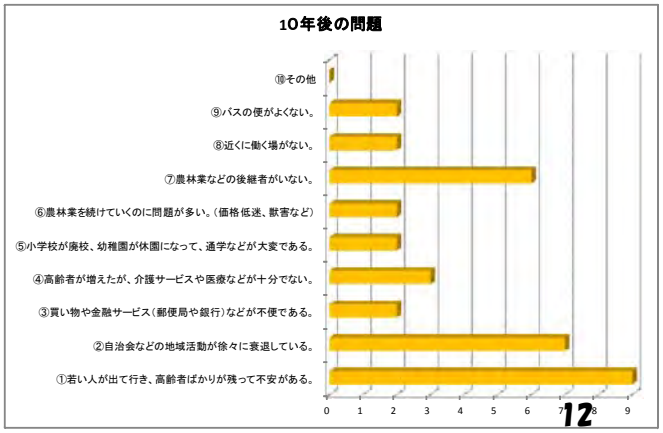
・地域が小規模だから、オリジナルを出しやすい。（川、有機農業、おまつりなど）

・特に自然の恵みが豊か。それを守ることが長谷のオリジナルになる。

・団塊世代のリタイア層が多くその人たちの活動がカギ。特に、農業や里山の維持に

●「柴北川を愛する会」の活動は、地域を何とかしようという機運のあらわれ。





12

3　グループワークの進め方

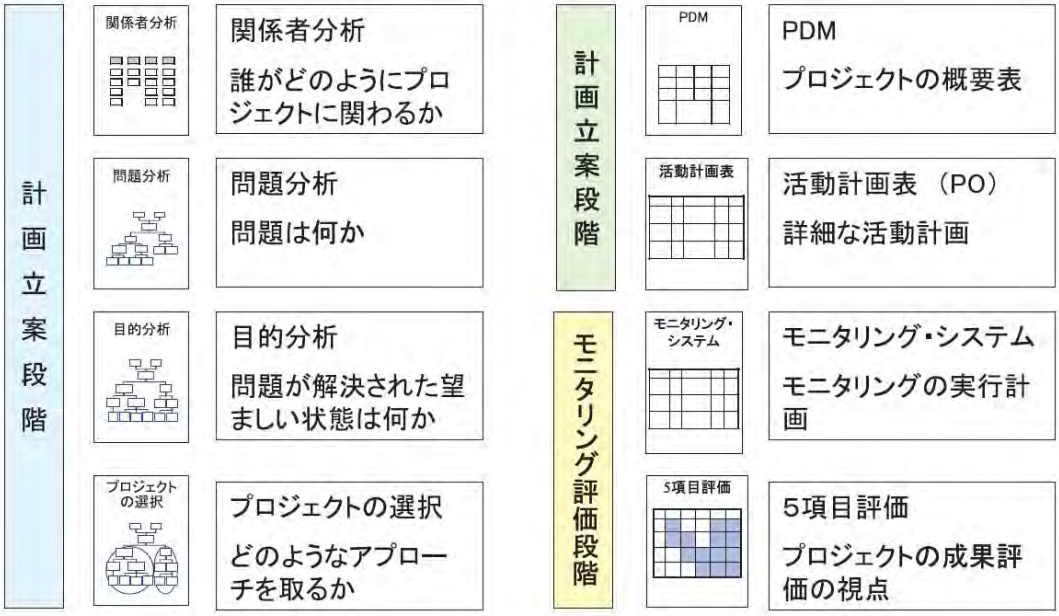
（1）PCM 手法を基本に

今回の研修は、ＰＣＭ（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法をなぞったワークショップ形式で行いました。

ＰＣＭ手法は、ＦＡＳＩＤ（国際開発機構）が、国際的な開発援助プロジェクトの立案・運営・管理能力を有する人材を養成するために採用している手法です。

PCM 手法では、開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM）」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて管理運営します。

図 A3－1　PCM 手法の全体構成



（FASID「PCM 手法の理論と活用」より）

（2）チーム編成など

●３チームを設定

・**チームＡ：地域生活の維持（少子高齢化・伝統文化・地域コミュニティなど）**検討チーム

・**チームＢ：環境保全・向上（里山環境・農村風景・鳥獣被害など）**検討チーム

・**チームＣ：安全・安心（自然災害・高齢者福祉・医療など）**検討チーム

●チーム編成（1 チーム 6～7 名）

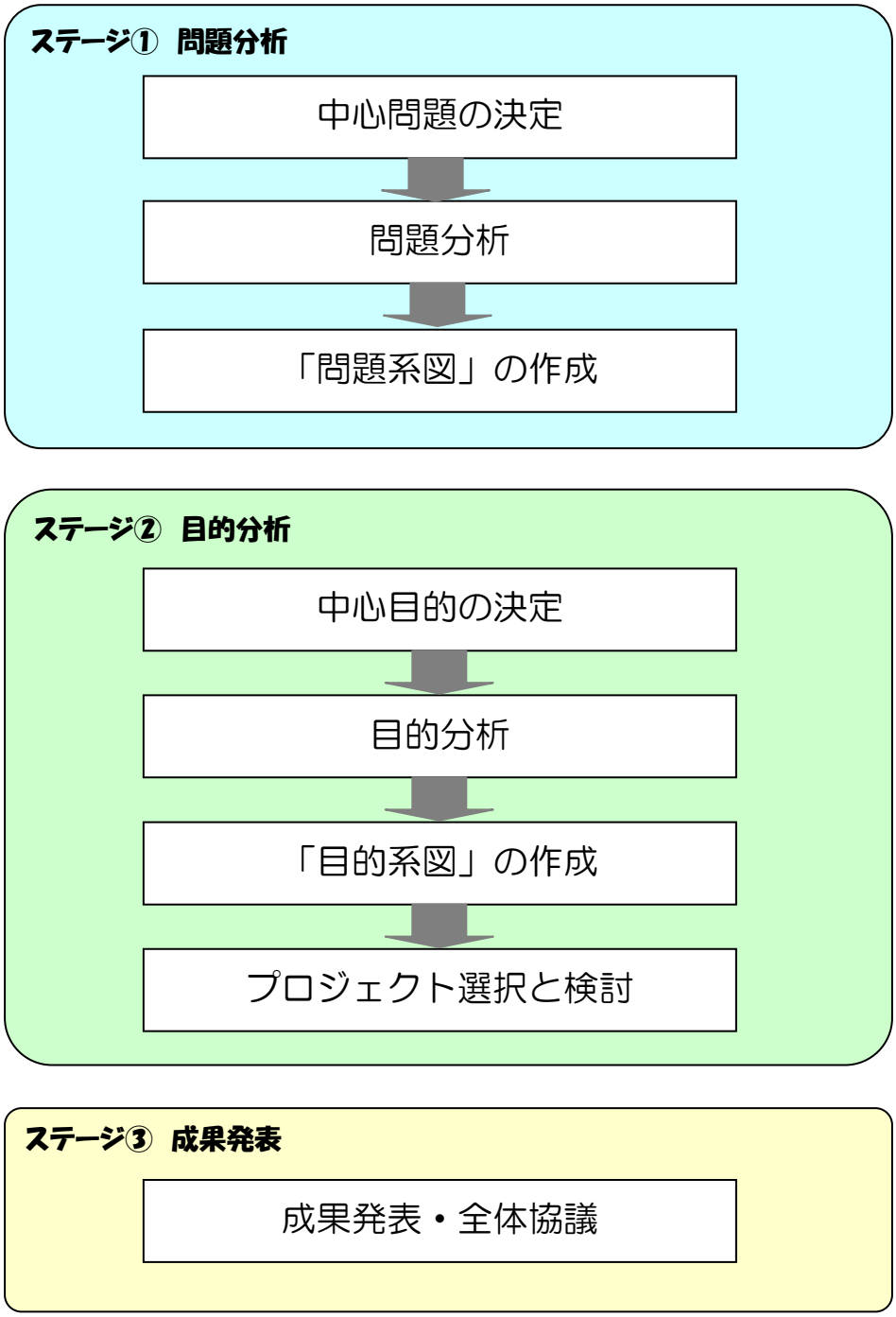
・若手技術者（1～2 名）：グループワークの進行役

・地元住民（2～3 名）

・シニア技術者（2 名）：グループワーク進行の補佐・共助研メンバー

（3）グループワークの手順

グループワークでは、PCM 手法に沿って以下の手順で作業を行いました。



●グループワークでの若手技術者の役割

グループワークは、チーム内の進行役のリードにより話し合いと意見整理で進めていきました。

若手技術者には、チームの進行役と記録係（意見をポストイットに書き出し、整理）を担当してもらい、参加者みなさんから意見を引き出し、長谷地域の問題の洗い出し及び必要なプロジェクトの提案を行っていただきました。

長谷地区のことをよく知っている共助研メンバーが、シニア技術者として進行を補佐しました。

（4）ステージ毎での進め方

1）ステージ①問題分析

●問題分析の方法

1.チームテーマについて「気になること」を発表する。

⇒メンバー全員が、ポストイットに 1～2 項目書き出し、発表する。

⇒地元住民は、日頃から感じていること。

⇒若手参加者・共助研メンバーは、外から見て感じたこと。

2.「中心問題」を決めて、白紙の真ん中に貼る。（赤のポストイット）

⇒全員が発表したら、項目の種類や共通点等を話し合い、「中心問題」を決める。

⇒「中心問題」を赤のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。

3.「中心問題」が起きている「原因」を話し合う。（「中心問題」の下半分に配置）

⇒若手は、一人が進行役、一人がメンバーの意見をポストイットに書き込み、白紙に貼る。

⇒進行役は、「中心問題」を引き起こしている「原因」を、メンバーから聞き出す。

⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。

⇒出された意見については、類似意見は寄せて配置し、また意見間の関係も整理して、中心問題の下半分に配置する。

4.「中心問題」から引き起こされている「結果」を話し合う。（「中心問題」の上半分に配置）

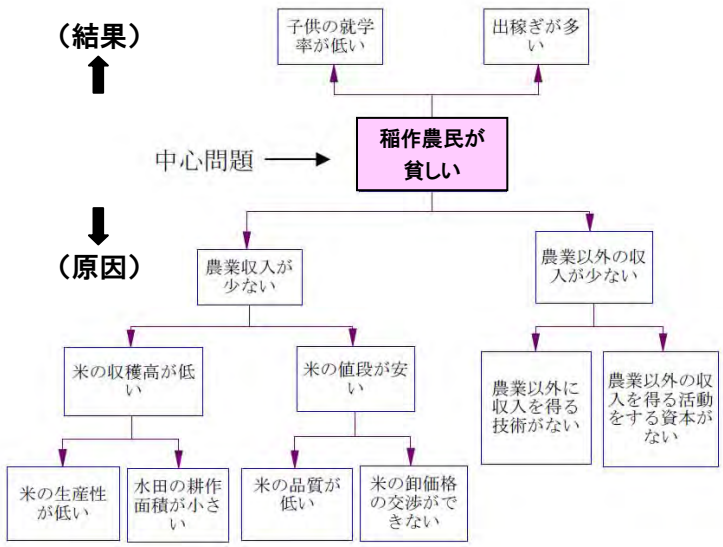
⇒「原因」と同様に「結果」について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心問題の上半分に配置する。

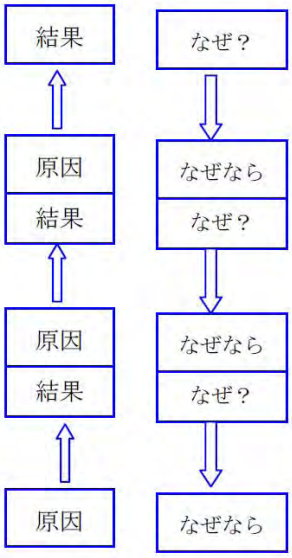
5.「問題系図」を完成させる。

⇒問題の原因、結果について十分に話し合う。

⇒「原因」と「結果」相互の関連性、詳しい内容、不足が無いか等を確認して「問題系図」を完成させる。

問題分析の例





2）ステージ②目的分析

●目的分析の方法

1.前日の「問題系図」を確認する。

⇒進行役が「問題系図」の概要を読み上げて、前日の話し合った内容を確認する。

⇒内容の追加や修正などについて、意見を聞く。

2.「中心目的」を決める。（緑のポストイット）

⇒問題系図の中心テーマや最も関心の高かった問題を選び、肯定の表現で目的系図の「中心目的」とする。（必ずしも中心問題の裏返しでなくても良い。）

例えば、「交通事故が頻繁に起こる」→「交通事故が大きく減少する」

⇒「中心目的」を緑のポストイットに書き出し、白紙の真ん中に貼る。

3.「問題系図」の「原因」を参考にしながら、「中心目的」を解決する「手段」を話し合う。（「中心目的」の下半分に配置）

⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的の解決手段（原因の裏返し）についてメンバーから聞き出す。

⇒意見はどんなささいな意見であっても拾い上げ、ポストイットに簡潔に書きとめる。

⇒出された意見については、現実的かどうか、マイナスの影響が出ないかどうかを確認し、中心目的の下半分に配置する。

4.「中心目的」から導かれる「直接目的」を話し合う。（「中心目的」の上半分に配置）

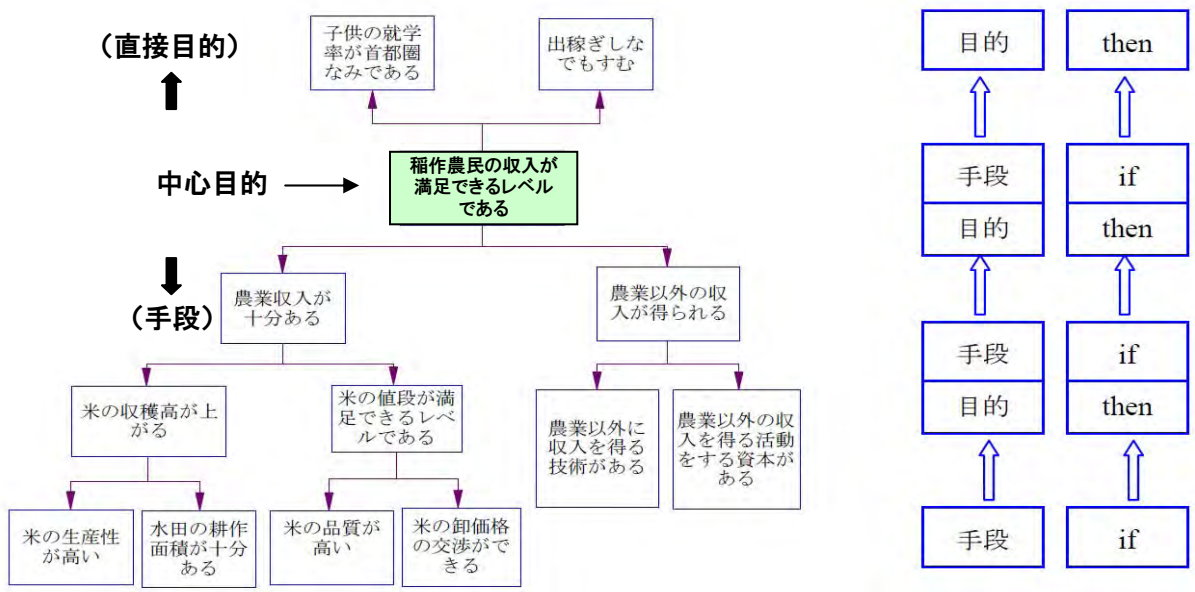
⇒「問題系図」を参考にしながら、中心目的から誘引される「直接目的」（結果の裏返し）について意見を聞き、ポストイットに簡潔に書きとめて、中心目的の上半分に配置する。

5.「目的系図」を完成させる。

⇒「手段」と「直接目的」について十分に話し合う。

⇒特に、「手段」については具体的な手段がわかるレベルまで話し合い、「目的系図」を完成させる。

目的分析の例



3）ステージ②の続き・プロジェクト選択

●プロジェクト選択の方法

1.「目的系図」から、プロジェクトを確認する。

⇒「目的系図」のなかで、プロジェクトの原型を構成している範囲を線で囲む。

⇒線で囲んだ範囲それぞれについて、それらが目指す目的と戦略を確認する。

⇒プロジェクトとして不適切なもの、実施が困難なものを確認し、対象から除外する。

2.重要なプロジェクトを１～2 選定し、その具体的な進め方を整理する。

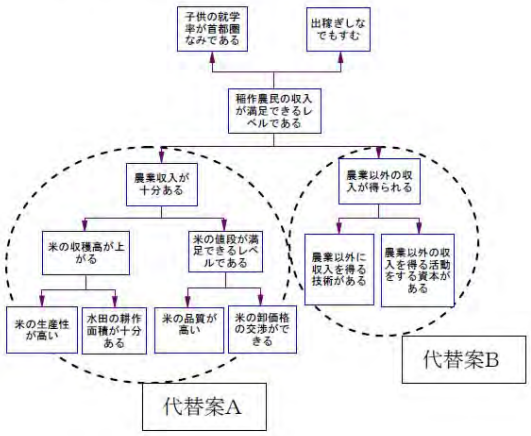
⇒選定したプロジェクトについて、以下の項目を話し合う。

- プロジェクトが対象とするモノ・人・コトは。
- 対象をどうしていくか。（目標と指標）
- 誰が主体となって行うか。
- 長谷地区としての体制をどうするか。
- 規模・範囲は妥当か。
- 手順をどうするか。
- マイナスの影響はないか。
- 目標が達成されると、長谷地区はどう変わるか。

⇒プロジェクトを、白紙にまとめる。（名前・目標・内容・体制等）

プロジェクトの選択の例

代替案を線で囲む



代替案を比較検討する

	代替案A	代替案B
ﾀｰｹﾞｯﾄ･ｸﾞﾙｰﾌﾟ	稲作農民 2700 人	稲作農民の一部 約 1500 人
受益者のﾆｰｽﾞ	非常に高い	高い
政策的優先度	非常に高い	高い
必要な資源	稲の新品種普及員 灌漑施設	資本金 小規模事業指導員
費用	大きい	中くらい
費用便益比	大きい	中くらい
技術的難易度	中くらい	中くらい
達成可能性	高い	中くらい
リスク	中くらい	中くらい

4）ステージ③・成果発表

●発表者：若手技術者＋地元住民

●発表時間：10 分

●発表スタイル：自由。「問題系図」や「目的系図」、プロジェクトまとめ等を使って。

●質問等：他のチームから質問・意見を受ける。５分程度

4　長谷地区の課題は、目標は

長谷地区における地域課題の検討切り口として、「地域生活の維持」「環境保全・向上」「安全・安心」の３テーマを設定し、それぞれに検討チームを編成してグループワークを行いました。
本章では、各検討チームでまとめられた、長谷地区の課題及び活動目標について紹介します。

（１）チームＡ：地域生活の維持

チームＡでは、長谷地区において今後とも日常的な生活を続けていくために、現在不安視されている問題を話し合い、チームの中心問題を「地域の後継者不足」に設定しました。
この問題の原因としては、地域の子供達が地域に魅力を感じなくなっていること、その背景にある農業の衰退や雇用の場の不足が挙げられ、また、小学校が無くなって地域内での行き来が減少していることも問題視されました。
その結果、人と人との交流が少なくなり、伝統文化の継承が難しくなりつつあること、空家は増えたがそれらが外から人を呼び込む受け皿とはなりえていないこと、等が指摘されました。
逆に地域に後継者が育つと、住む人が定着して農業者が増えるなど雇用ができ、子供が増えて伝統文化が続くなど、地域全体で元気がでるなどの効果が期待でき、そのために、健康的に働ける環境を整備することとあわせて、愛郷心を育てる取組の必要性が指摘されました。
そして、その第一歩として、「長谷 Gallery Café プロジェクト」が提案されました。

１）中心問題の検討

若い人が留まらない
・若い人が少ない。
・若い人達が住める，住みたいと思う街並みがない（隣が遠い）
・子供達が長谷に残ってくれるか。
・地域の後継者不足
・Ｉターン者も人口定着のために。
・インフラ面はＯＫと考える。
・伝統文化が伝わらない。

地域の助け合いが減少
・地域のサポート
・空き家が増える。
・空き家になっても貸しにくい。
・高齢者ばかりになった地区を地域でどう支えていくか。
・淋しい。
・仲間が少ない。
・生活にハリがない。

中心問題として「地域の後継者不足」

コミュニティの場の喪失
・お互いを、環境を知る場面が減った。

移動が不便
・車以外での移動が大変。
・不便（施設サービス，商業サービス，交通）
・バスは３便。コミュニティバスもあり（多数）

買い物が不便
・買い物が大変
・協働購入（週１）⇒　畑でとれる。
・買い物が不自由

２）問題分析

空家は増えたが、人は入らない。
・外からの人が住む家がない。
・住みたい人と家を貸したい人のマッチングがない。（土地の問い合わせはある。）

人と人との交流が減少
・人と人との交流が減った
・昔は小学校・通学路が交流の場）
・車のみでの移動が増えた。
・農業で昔は交流があった。

伝統・文化が継承されない
・伝統，文化の継承ができていない。
・親から子供達へ引き継ぐものことが無い。
・近代化による継承するノウハウが減少した。
・伝統を守るのは苦しいものがある。生活の一部ではなくなった。
・ワクワクする事が必要⇒地域から創出する。
・助け合いが少なくなった。

結果

地域の後継者不足

原因

地域の魅力不足
・地域の魅力がない。特徴がない。情報がない。
・魅力を感じなくなってしまった。
・注目（メリット）点が少ない
・あるのだが、地域の魅力が十分にＰＲできていない。
・地元の子は努力しない。地区への満足感（安心感）がある。（大分への近さが逆効果）。

地域内での行き来の減少
・奥に行かない。小学校がなくなって益々行かなくなった。
・長谷の奥に行かない。生活の方向は、大分に向いている。

雇用の場が不足
・働く場所がないというイメーシがある。
・職がない。収入を得る場所がない。
・産業が一次産業のみ。
・スキルをつけるためには、一時的に出ざるを得ない。
・長谷では農地（田）だけでは食べていけない。（畑が少ない）
・外に出て働くためには教育が必要。

３）目的分析とプロジェクト選択

空家が減って、雇用の場が

・未利用地，空き家が減る。
・Ｉターン者の生活体験がマチの人に伝わり、マチとの交流が増える。
　⇒　Ｉターンの更なる増加。
・移転者（家）により、街並が整備される。
・地区内の循環が始まり、仕事ができて働く所ができる。
・各所めぐり　⇒　小売店の増加

地区全体に元気が出る

・イベントが増えコミュニティが増える。
・希望が出る。守りの生活から新しいものに挑戦する活力が生まれる。
・生きる力、刺激が増す（元気が出る）。
・高齢者の経験を若い世代に伝える機会が増えて、老後が楽しくなる。
・高齢者の一人住まいが減って、生活がしやすくなる。

環境整備が進む

・美化の人手が増える。
・自然環境の整備ができやすい（河川・山林他）。
・各所維持に対する住民意志の向上化

農業する人が増える

・田園風景が保たれる可能性がある。
・農地の保全管理が進む。

子供が増える

・子どもの友達が増えて自然の中で遊べるようになる可能性がある。
・若い世代の家族が増えて、子供が増え、小学校が必要に。

伝統文化が続く

・伝統文化がつながれる可能性がある。
・昔ながらの伝統文化，遊びなどが復活し、コミュニケーションの場が増える。

住む人が増える

・長谷に住みたいと思う人が増える。　・長谷で育った人が帰ってくる。

直接目的

中心目的
地域に後継者がいる

長谷 Gallery Café プロジェクト

手段

受け入れ体制の確立。

楽しく健康的に働く環境をつくる。

地域全体を教育の場に

・子供のための教育環境の整備
・子供を対象とする自然の体験学習
・実体験（田植等）
・親の理解共感　⇒　子への教育
・地域を題材にした体験教育
・教育フィールドの資源が多い。
・子供のスキルＵＰ
・課外学習（午後活用）
・校区を越えた学生を集める。

地域の施設を交流の場に

・地域の施設を住民に使いやすくする。
・地域活動の核となる施設が使えない。
・条件の改正／施設の目的外使用

義務感をぬぐう必要性。愛郷心を育てる。

ふるさとまつりの開催

・ふるさとまつり
・町外に出た人に帰ってもらう。
・運営母体をつくる必要

伝統文化を継承する仕組み

・知識の継承の仕組みづくり。
・匠の登録達人
・神楽
・獅子舞
・達人名簿の作成
・地域の習慣になじんでもらう。

ＩＴの活用を（ＩＴ環境は長谷地区は◎）

・ケーブルＴＶの活用（長谷ＰＲ）　・ＰＣ教室とか指導する場所づくり。

（2）チームＢ：環境保全・向上

チームＢでは、長谷地区の自然環境や生活環境等において現在不安視されている問題を話し合い、チームの中心問題として「河川の水量・水質の悪化」「鳥獣の被害の増加」「橋の保全をしなくなった」「里山の荒廃」の４つの問題に着目しました。

「河川の水量・水質の悪化」の原因としては生活用水の流入や農地利用の減少、「鳥獣の被害の増加」の原因としては動物の生態環境の変化、「橋の保全をしなくなった」の原因としては石橋の価値が認められなくなったこと、さらに「里山の荒廃」の原因としては山の価値が下がったこと等が挙げられ、地区住民の生活様式や就業のかたち等の変化が地区の様々な環境変化を引き起こしていることが問題視されました。

その結果、河川への愛着心の低下及び氾濫等の災害危険性の増加、農業の衰退、歴史的な資産としての石橋の崩壊危険性の増加、さらに、周囲の山との関係性低下等が指摘されました。

逆に、これらの問題が解消の方向に進むと、地区全体の環境の向上により、生活の場、産業の場としての地域の魅力が大きく向上すると指摘されました。

そして、このような地域環境の向上に向けた重点的な取り組みとして、「合併浄化槽推進プロジェクト」「アナグマ駆除プロジェクト」「バイオマス燃料供給プロジェクト」が提案されました。

１）問題分析

①河川の水量，水質悪化

結果

川への愛着の低下
- 魚類の減少（メダカなど）
- 子供が魚とりできない。
- 川への愛着の低下
- 三面張りの護岸工事の増加
- 川に入れなくなった。

河川氾濫の可能性
- 河川内にヨシの増加
- 水流の変化。水面が見えない。
- 土砂の堆積
- 護岸が浸食される。
- 河川氾濫の原因になる。

河川の水量・水質悪化

原因

生活用水の流入
- 生活用水をそのまま流している。
- 化学洗剤の使い過ぎ。
- 油処理の啓蒙が不十分
- 合併浄化槽が不十分
- 高齢化で必要性を感じていない。

農地利用の減少
- 人口減少に伴う農地利用減少

②鳥獣の被害の増加

結果

農業が衰退
- 収穫ができない。
- 被害で農業のやる気がなくなる。
- イノシシに荒らさせるので農地の減少（作らない）。

鳥獣の被害の増加

原因

動物の生態環境の変化
- カラス，イノシシ，シカ（アナグマ）の増加
- 射撃範囲が狭い。
- 狩人の減少
- 山の食料の減少

③橋の保全をしなくなった

結果

石橋の崩壊

・自然崩壊の可能性

橋の保全をしなくなった

原因

石橋の価値が認められない

・費用対効果がない。
・観光価値がない。
・橋を使用してない。
・石橋の恩恵がない。

④里山の荒廃

結果

山が縁遠くなった

・山に人が入らなくなった。
・山遊びをしなくなった。
・鳥獣被害の増加。
・山菜のできる場所がなくなった。
・山菜がとれなくなった。
・季節の食材が食べられなくなった。
・お金を出して買う必要ができた。

里山の荒廃

（山が荒れている，林道が荒れている。）

原因

山の価値が下がった

・子供が山に関心がない。
・山がお金にならない。
・シイタケの栽培の減少。
・炭焼きの減少
・海外の木材が安くなった。
・林業の減少。

2）目的分析とプロジェクト選択

①河川の水量，水質悪化

川に人が近づく
- ホタルが増える。
- 子や孫が帰ってくる。
- 見る人が増える。
- 水洗トイレが増える。
- お年寄りが楽になる。

川からの恵みが増える
- 魚，カニが増える。
- 米がおいしくなる。
- おいしいものが食べられる。
- 河川内のヨシが減る。
- 水面が見やすくなる。

直接目的

中心目的
河川の水量・水質を改善する

合併浄化槽推進プロジェクト

手段

合併浄化槽を普及させる。

住民の取り組み
- 婦人会等に普及活動をしてもらう。
- 手出しのお金（10～20 万）を準備してもらう。
- 近隣に迷惑をかけない。
- 廃油石鹸の普及

行政による促進
- 市の補助金を認知させる。
- 合併浄化槽の良さを知ってもらう。
- 市の広報の徹底
- 民間建設会社のＰＲの拡大。

師田原ダムへの取水量の再調査

②鳥獣の被害の増加

直接目的

農業の継続
- 家庭菜園を続けられる。
- 農作物の被害額を減らせる。

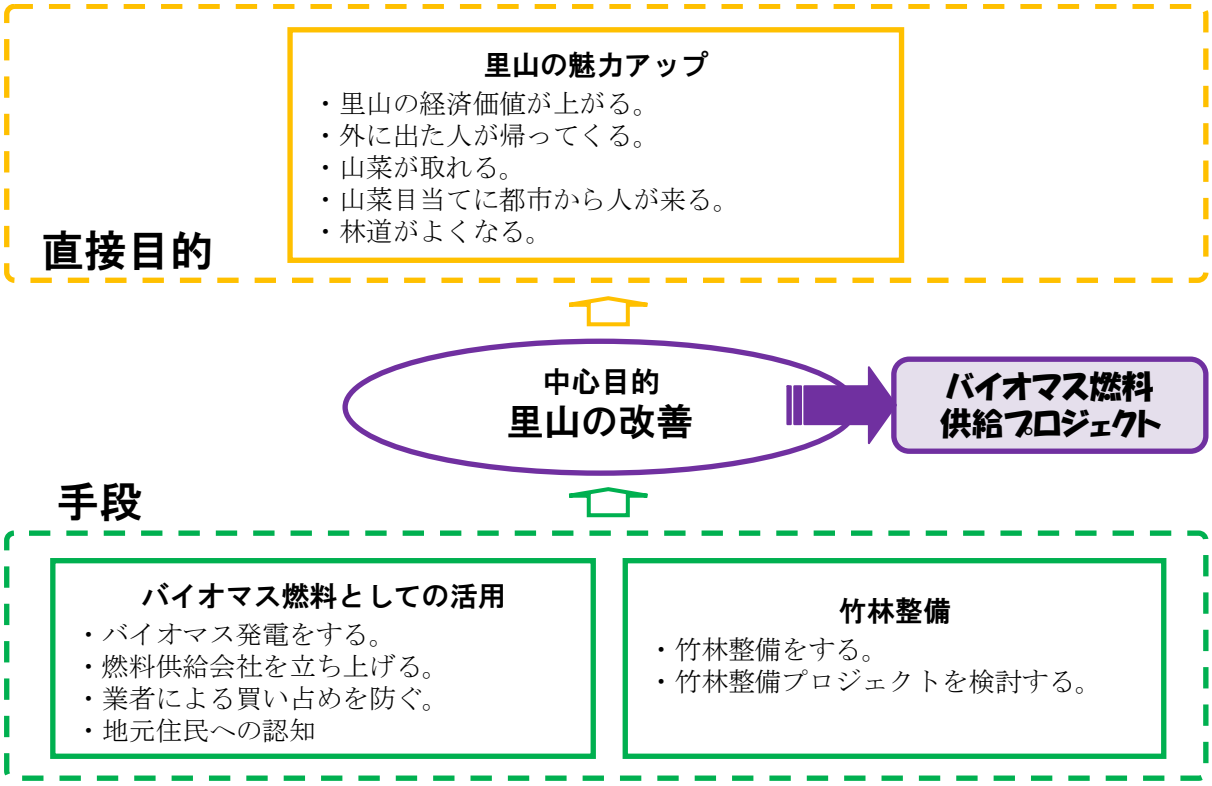
中心目的
鳥獣被害を無くす

アナグマ駆除プロジェクト

手段

アナグマを駆除する
- アナグマの生態を知る。
- アナグマ対策講演会を開く。
- アナグマ対策の事例をネットで調べる
- 市にアナグマ駆除を要請する。
- 補助金をもらいやすくする。

③里山の荒廃



チームＡでの検討の様子

チームＢでの検討の様子

（3）チームＣ：安全・安心

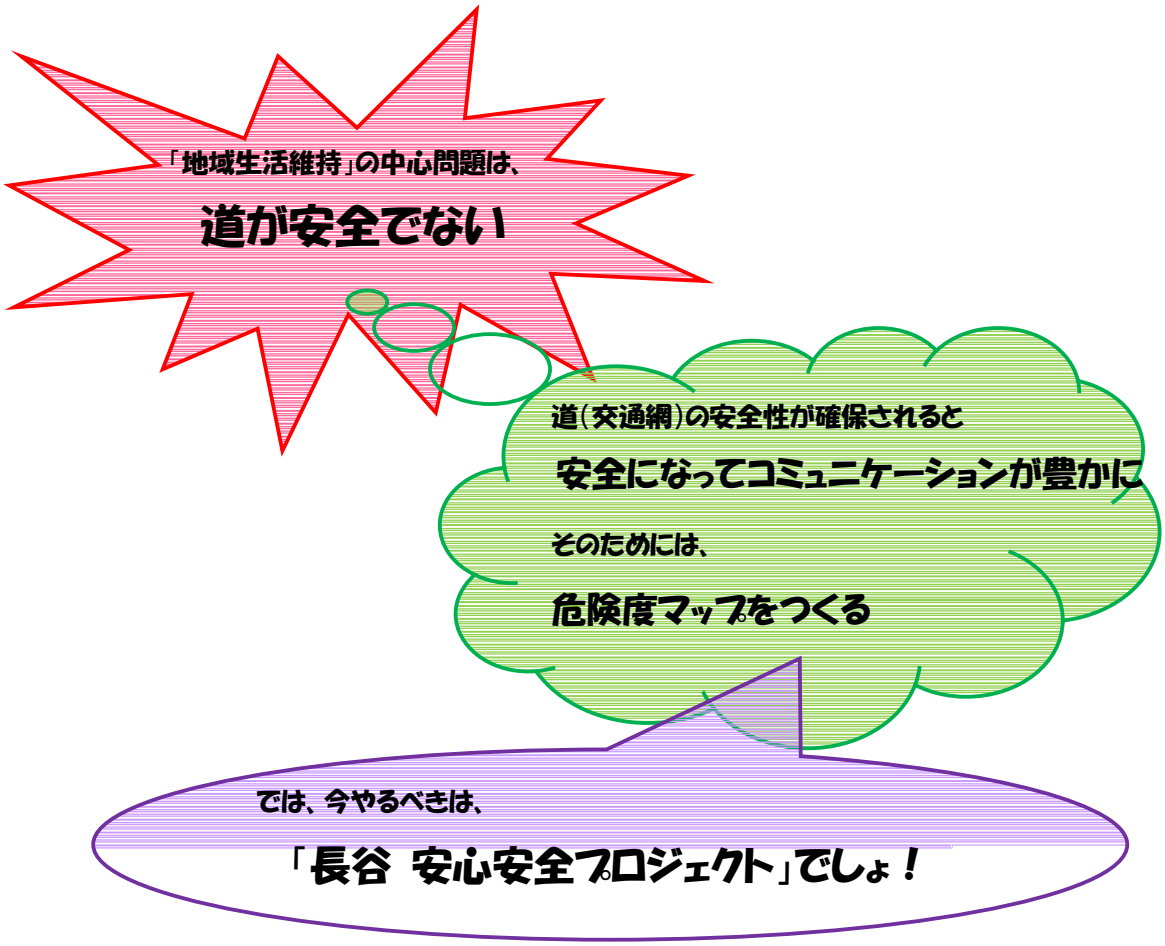
チームＣでは、長谷地区で暮らしていく上で、平穏な生活の維持の観点、特に生命の維持の観点から現在不安視されている問題を話し合い、チームの中心問題として「道が安全でない」という問題を設定しました。

この問題の原因としては、地域内に路線バス等の運行はあるものの本数が少ないことから日頃の移動は自動車利用が必要となっているなか、そのための道路環境が構造や安全対策等の面で十分ではなく、そのための整備に向けた取り組みに自治区間や世代間で温度差があること等が問題視されました。

その結果、災害等の緊急時の利用に不安があること、高齢化に伴い移動そのものに不安があること、等が指摘されました。

逆に地域内の道路の安全性が確保されると、交通事故等の減少につながるとともに、そのための検討を通して地域のコミュニケーションが豊かになる等の効果が指摘されました。

そして、その第一歩として、「長谷 安心安全プロジェクト」が提案されました。



１）問題分析

緊急時が不安
・救急時に入っていけない。
・山崩れで道路が遮断

結果

高齢化と共に移動が不安に
・高齢になり車に乗れなくなった時の不安
・移動販売車が来ても高くて買わない。

道が安全でない

原因

道路の安全対策が不十分
・ガードレール等がない。
・不慣れな人の運転極めて危険。
・落葉でスリップ危険。
・道路延長が長くてすべては落葉除去できない。
・ボランティアで掃除してくれる人の高齢化。

道路の構造が問題
・地形の問題で狭いカーブが多い)。
・道が狭い（急カーブ)。
・道路を広く、せめて５ｍにして欲しい。

生活に車が必要
・集落同士が離れている。
・各戸の情報は集落内で共有。しかし、外へは？
・車必須の生活
・公共交通機関（バス）等が不便で、使う人が少ない。
・コミュニティバスが補完しているが利用者は少ない。
・郵便局の近くに雑貨屋が欲しい。

道路周辺の地形が問題
・山崩れの場所の地域が多い。
・斜面に囲まれている（山間)。

道路整備意識に温度差
・自治区からの申請で改良事業へ。
・区長の個性で温度差がでる。
・支所の担当者の考え方
・今の環境でも満足している。
・地元の高齢者と若者の意識の差

道路の情報マップがない
・危険度マップがない（情報の共有ができない)。
・情報の交換する場がない。
・問題箇所／危険箇所／その他色々

2）目的分析とプロジェクト選択

直接目的

安全になり地域のコミュニケーションが豊かに

・危険箇所の注意換気
・交通事故の減少
・自分達の地域に興味を持つようになる。
・地域，家族でのコミュニケーションツール

中心目的
道（交通網）の安全性を確保する

長谷 安全安心プロジェクト

手段

危険度マップをつくる。

マップづくりから

・マップづくりを事業化する。
・区ごとの温度差から解消する。
・定量的に評価でき、各区平等に対策が進む。

プロジェクトの体制づくり等

・「長谷安全・安心プロジェクト」を立ちあげる!!
・共助研（専門家）が支援
・カーナビに長谷情報を入れてもらう。
・外来者向けの情報提供看板の設置

チームＣでの検討の様子

5 “長谷のあした”に向けて

長谷地区における「地域生活の維持」「環境保全・向上」「安全・安心」の３テーマの検討から、当地区において今後重点的に取り組むべきとされるプロジェクトが提案されました。

本章では、“長谷地区のあした”を築くために、第一歩として進めるべきとして提案されたプロジェクトについて紹介します。

研修会参加者（三ノ岳なかよしパーク研修センターにて）

（１）チームＡ：地域生活の維持のためのプロジェクト提案

長谷 Gallery Café プロジェクト

■目的

長谷地区に地域の後継者を育てる。

そのために、「若い人が長谷を好きになる。」「若い人が長谷を知る。」「若い人が長谷をひっぱる。」ための仕組みづくりが重要。

■目的を達成するために心がけること

●長谷の人が「好きなこと」「したいこと」の探索

・アンケートをする。
・ワークショップを行って、「好きなこと」「したいこと」について発表し、議論する。
・対象者は、関係が希薄な人を対象にする　⇒　若者が対象（長谷に住む人）
・そのために、ＰＴＡを活用し、若い世代に呼びかける。
・また、外部の興味ある人も集める。

●好きなことで集まれる場づくり。

・若い人が自発的にきっかけをつくる。
・楽しく人が集まる場所（イベント）とする。
・ふれあい広場 IN 長谷がそのきっかけとなる。
・伝統・文化の記録を残す。（いつでも復活できるように）
・多様性，選択性のある体験の場所づくり。
・まち歩き（歴史，自然）も良い。
・自分発見の場としたい。

■長谷 Gallery Café(ギャラリー カフェ)プロジェクト

●一人ひとりの思いを気楽に発表できる場として・・・長谷 Gallery Café

・カフェでは、誰かが何かをやっている。
　⇒例えば、“○日金曜の夕方 6:30 は、○○さんが・・のお話をします。”
・カフェには、みんなの笑顔や懐かしい写真がはってある。
　⇒思い出Ｎａｖｉなどを使って
・若い人が企画する！　運営には多くの人が関わる。
　⇒長谷獅子舞 Café，長谷神楽 Café など。今までの活動を長谷 Café で。

●場所は・・

・最初は・・・個人のお宅で始めても。
・続いて、公民館とか、小学校跡地を活用につないで。

●プロジェクトを支えるために

・ホームページで情報，イベント内容を提供する。
・企画を実現するために、匠（たくみ）（暮らしの技の達人）名簿を作成する。

（2）チームB：環境保全・向上のためのプロジェクト提案

合併浄化槽推進プロジェクト

■目的

長谷地区内の合併浄化槽設置を推進する。

長谷地区内の全世帯で合併浄化槽を設置して、河川の水質改善を図り、柴北川の豊かな自然を回復する。

■目的を達成するために心がけること

●活動の成果又は条件として

・長谷地区全体で、推進組織をつくる。
・豊後大野市との協力体制をつくる。

●活動による成果目標をたてる

・普及率を、５年以内に 20%アップ
・毎年、水質調査を行い、設置による効果を確認する。

■合併浄化槽推進プロジェクト

●推進団体を結成し、合併浄化槽設置を推進する。

・長谷地域開発促進協議会に入ってもらう。
・合併浄化槽の設置マップを作成する。
・民間会社の広報を拡大する。

●市役所と連携して推進する。

・合併浄化槽の現状データを提供してもらう。
・整備のための補助金を確保してもらう。
・市からの広報を徹底して進めてもらう。
・河川の水質調査を実施してもらう。

●外部団体に協力してもらい進める。

・河川の水質調査について、大分高専等に協力してもらう。
・マップ作成について、外部団体（共助研等）に協力してもらう。

●設置による成果を確認する。

・毎年、普及率の目標達成状況を確認する。
・毎年、河川水質の改善状況を確認する。
・設置による成果を市の広報等により、地区住民に知らせる。

プロジェクトNo.1　合併浄化槽推進プロジェクト

	プロジェクトの要約	指標	入手手段	外部条件
上位目標	・河川の水質改善	・河川の水質調査	・大分高専の調査結果 ・市役所へ調査依頼	・豊後大野市にプロジェクトに関わってもらう。
プロジェクト目標	・合併浄化槽を推進する。	・合併浄化槽の新規設置個数 ・普及率を5年以内に〇%⇒20%UP	・合併浄化槽の現状を役場から入手	・豊後大野市に補助金を確保してもらう。 ・市長と議会の理解が必要
成果	・推進組織をつくる。 ・長谷地区全体でつくる。			・長谷地域開発促進協議会に入ってもらう。
活動	・市の広報の徹底 ・民間会社の広報活動の拡大 ・合併浄化槽の設置マップをつくる。		・市役所から合併浄化槽のデータをもらう。	・地図作成の外部支援を得る。 ・豊後大野市支金援助⇒紫北川愛する会にお金が出る。 ・共助研のGISチームが作業をする。

プロジェクト No. ２　アナグマ駆除プロジェクト

プロジェクト NO. ３　バイオマス燃料供給プロジェクト

（3）チームC：安全・安心のためのプロジェクト提案

長谷 安心・安全プロジェクト 【Nagatani C.S.P】

■目的

長谷地区内の交通網の安全確保に向けて、危険度マップを作成する。

長谷地区内では、路線バス、コミュニティバスが運行されているものの本数が少なく、基本的な生活の足は自動車である。

しかしながら、そのための道路網については、カーブが多く狭い、安全対策が十分でない、道路情報のマップが無いなどから緊急時の通行に不安があり、また高齢化が進んでいるため、平常時でも通行に不安な点が多い。

この不安を解消するとともに、地区内の住民相互のコミュニケーションを高めることを目的として、道路の危険度マップ作成を目的とするプロジェクトを実施する。

■目的を達成するために心がけること

●活動の成果又は条件として

・長谷地区全体で危機意識を喚起して、活動に参加してもらう。
・豊後大野市や外部の専門家との協力体制をつくる。

●活動による成果目標をたてる

・住民の安心度、満足度を高める
・定期的にアンケートやヒアリングを行って、効果を確認する。

■プロジェクトの進め方

●先ずは、住民の安全・安心に対する意識を確認する。

・住民参加によるワークショップを開催する。
・住民による地域歩きを実施し、危険箇所等を現場で確認する。
・民間会社の広報を拡大する。

●危険度マップを作成する。

・市道の状況がわかる地図情報データ（ＧＩＳ）を提供してもらう。
・住民の話し合いで、貴県道マップを作成する。
・危険度マップを公開して確認してもらうとともに、住民間のコミュニケーションツールとして活用する。

●外部団体に協力してもらい進める。

・豊後大野市から市道情報（ＧＩＳデータ）を提供してもらう。
・マップ作成のワークショップについて、外部団体（共助研等）に協力してもらう。

長谷 安心・安全プロジェクト　Nagatani CSP

	プロジェクトの要約	指標	入手手段	外部条件
上位目標	・交通網安全の確保	・住民の安心度 ・住民の満足度	・住民アンケートによる	・住民関心度の低下
プロジェクト目標	「長谷安心安全プロジェクトNagatani C.S.P」	・危険度マップの充実度	・住民へのヒアリング	・住民の積極的な参加発言
手法			・専門家を加えたワークショップ	
成果	・危険度マップの完成	・住民のコミュニケーションツールになっているか。	・住民からの評価	・マップの更新
活動	・ワークショップの開催 ・住民による地域歩き ・マップのとりまとめ ・マップの公開 ・マップから読み取れる必要な事業の選択	投入 ・事業費の確保 ・市道が記入されている最新マップ(GIS)	・地域住民の参加 ・アドバイザー(共助研)	・住民の熱意 前提条件 ・住民の危機意識 実施に伴うリスク ・活動に参加したがらない住民の発生

6　参加者の感想 その他

（１）若手技術者の感想

●若手技術者へのアンケート質問票
研修会参加の４名の若手技術者から、参加しての感想に関するアンケート回答が寄せられました。アンケートの質問項目は、以下の通りです。

若手技術者向け・フィールド参加型「地域課題発見・解決力」養成研修会

若手技術者　参加アンケート

平成 25 年 11 月 15 日からの 2 日間の研修、お疲れさまでした。
今回の研修の成果を、今後の活動につなげるためにアンケート作成にご協力ください。
なお、アンケート作成にあたっては、研修中に使用した資料等を参考にお答えください。

質問１：検討の対象となった「長谷地区」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください（箇条書き）

質問２：質問１の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の人の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。（質問１の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください）

質問３：地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください（箇条書き）。

質問４：質問１で記入いただいた課題の解決方策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問１の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）
(番号)　①②③・・・・・・・・・・・・・・・・記入欄　・・・・・・・・・・・・・・・・・・

質問５：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

質問６：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）
質問 6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？
①たいへん役に立った　②役に立った　③あまり役に立たなかった　④その他
その他等意見（　　）
質問 6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？
①積極的に参加を勧める　②勧める　③あまり勧めない　④その他
勧めない理由その他等意見（　　）
質問 6-3：今回の研修は、１泊２日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？
①もっと長いほうがいい　②ちょうどいい　③長すぎる　④その他
その他等意見（　　）
質問 6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等
（　　）

ご協力ありがとうございました。

●若手技術者の感想

質問１：検討の対象となった「長谷地区」について、チームで扱ったテーマ上の課題についてわかったことをご記入ください（箇条書き）

質問２：質問１の課題の中で、地元の方との話し合いの中でわかった課題、地元の人の意見がなければ浮かび上がらなかった課題はありましたか。その課題と、地元の方の視点について気づいたことをご記入ください。（質問１の該当する課題番号を記載し、その欄に記載ください）

【チームＡ：地域生活の維持】
①長谷地区における後継者不足
⇒質問２回答：後継者不足であるが、単純に自然環境だけを目的に住んでほしくない、また逆にそうした地元に根付く環境をＩターン者などに押し付けてほしくない、という双方の視点があった。地元関係者としては伝統文化の継続、農業の継続など長谷にしかない文化の後継者を望まれている。生活インフラが整えば単純に人口増になり、産業が芽生え、活性化することだけを望んでいないということである。
ただし、地域の維持のためにはＵターン者への配慮や若者の流出を防ぎ、地元に残ってもらっても、大分市内への交通、また快適な住環境の整備が必要な点も理解されつつ、新規居住者の意見も今後取り入れていくという方針であった。
【後継者の裾野を増やすこと⇒血縁の後継者でなく、地域の後継者として】
②田畑も少ない地区であり、安定した収入が見込めない
③史跡や文化、美しい自然の活用が出来ていない（指定文化財でない為）
…馴れ親しみ過ぎて再確認されにくい
④車がない場合（人）の交通が不便（コミュニティーバスなどはある）
⑤小学校がなくなり、トンネル側基準で奥の地区へは行かなくなった（交流の減少）
⇒質問２回答：小学校の存在意義が、地域に残っている人にとっても非常に大きな位置付けであった。今後の活用についても具体的な構想を持たれていた。
⑥ワクワク感が得られない

【チームＡ：地域生活の維持】
①働く場所がないという先入観
②若い人がいない（出ていく）という先入観（少なくとも半分は非高齢者）
⇒質問２回答：若い人がいないという話は地方部の町ではどこでも叫ばれているが、話を聞いていると、地域に関心がない非高齢者が多いことだと感じた。
③ライフスタイルの変化により、世代後継がうまくいかない
④外から人が来ない

【チームＢ：環境保全・向上】
①合併浄化槽の設置が不十分であり、柴北川の水質の悪化が問題としてあること
⇒質問２回答：合併浄化槽設置の補助金の情報が十分行き届いていないこと、また合併浄化槽を必要と感じていない方も多くいること
②農園への鳥獣被害、特にアナグマによる被害が増加していること
⇒質問２回答：鳥獣被害は、農家だけなく家庭菜園などをする人のやる気もなくしていること
③里山の荒廃により、林道がふさがり山菜取りに入れなくなったこと
⇒質問２回答：里山の荒廃により林業従事者でない方も生活に変化が起きていること
④林業をやっても採算が取れないこと
⇒質問２回答：年配の方でも採算がとれるのであれば山に手を入れる気持ちがあること
⑤歴史ある石橋も保全費用が高く、将来崩壊の可能性があること
⇒質問２回答:地元の人にとって石橋は普段から身近にあり、あまり貴重に感じていないこと。最近では、新たに橋が架けられ石橋を利用しなくなったため、普段の生活で石橋の存在価値を見出せないでいること

【チームＣ：安全・安心】
①道が狭く救急車や消防車が奥まで入っていけないところがある
②落ち葉でスリップする
⇒質問２回答：長谷来る際通った県道は通行しやすいイメージあったが、雨のあと等は落ち葉が散乱するのか、とまだ長谷の現状の一部くらいほどしか見られていないことを実感した。さらには、以前はボランティアで道の清掃を行ってくれていた方がいたそうだが、道路延長

が長いことに高齢化が進んでいることも重なり、多くの部分で清掃を行えていない現状があることも地元の方と意見交換を行い始めて知ることとなった。
③ガードレールがない
④集落同士が離れている
⑤災害時に道が遮断される
⑥病院までが遠い

質問３：地域課題を発見するために、大切なこと、必要なことをご記入ください（箇条書き）。

【チームＡ：地域生活の維持】
・その地域のフィールド（文化や財産など）を良く知ること
・地域の方との交流

【チームＡ：地域生活の維持】
・いろいろな人の話を聞くこと
・いろいろな人に意見をすること
・可能であれば、そこで生活してみること
・より多くの事例を収集すること

【チームＢ：環境保全・向上】
・地域の人が、今の生活の不満や不安を抱いていること。
・マネイジメント側がある程度の土地のことを知っていること。
・お互いの意見を理解し、否定しないこと
・会場の雰囲気が、意見を出しやすい場であること

【チームＣ：安全・安心】
・現地を訪れること
・現地の人と対話をすること（親密になることも大事）
・現地を自分の足で歩いてみること
・よそ者ではある自分の意見を率直に話すこと
・現地の人は当たり前と思い気づいていない（受け入れてしまっている）不便さ、地域課題を聞き出すこと。

質問４：質問１で記入いただいた課題の解決方策について、今回の研修期間のなかで考えた対応方法を記入ください。（質問１の番号と対応して、課題の番号の欄に記入ください）

【チームＡ：地域生活の維持】
①生活環境整備の促進化
②農業後継者の育成（外部よりの受け入れや、シーズンレクレーションの活用）
③施設案内板の設置や歴史マップの作成・散策コースの美化
④補助事業において運賃支援及び増便対策
⑤長谷カフェ・ギャラリーの設置（憩いの場の活用：伝統芸能や語り部の活用）
⑥長谷カフェ・ギャラリーの設置（I ターン者 U ターン者の活用）

【チームＡ：地域生活の維持】
①長谷ギャラリー・カフェ計画

【チームＢ：環境保全・向上】
①合併浄化槽の PR 活動の徹底、合併浄化槽設置状況マップの作成、廃油石鹸の使用
②アナグマの生態を知るために、アナグマ対策講演会の実施、ネットでアナグマ対策を検索
③竹林整備プロジェクトを設置し、対策等を協議する
④バイオマス発電所建設に伴い、燃料供給会社の設立。燃料の買い占め防止のために住民へ注意喚起の実施

【チームＣ：安全・安心】
①地域の人たちと一緒にまち歩きなどをして改善必要箇所を浮き上がらせる。役所へ改善要求を出す。

②地域の人たちで役割分担を行い地域で管理するようにする
③地域の人たちと一緒にまち歩きなどをして改善必要箇所を浮き上がらせる。役所へ改善要求を出す。
④自家用車に依存しなくていいような交通ネットワークを形成する
⑤地域の人たちと一緒にまち歩きなどをして改善必要箇所を浮き上がらせる。役所へ改善要求を出す。
⑥①を解決することにより病院までの速達性を向上させる。

質問５：課題解決策を見つけるために、大切だと思われることをご記入ください。（箇条書き）

【チームＡ：地域生活の維持】
・地域が重んじている事、誇りに想っていることの理解
・すべてに対して対処するのではなく、優先度を考えることが必要
・補助事業の活用

【チームＡ：地域生活の維持】
・誰でも気軽に提案できること（若者が中心となること）
・お金をかけずに楽しんでできること
・上記２つが叶うようにまちづくり活動団体がフォローすること
・最終的には活動拠点をつくること

【チームＢ：環境保全・向上】
・マネイジメント側に解決に導くためのある程度の知識・技術が必要なこと
・地域の人に、解決したいという熱意があること
・課題の原因を探り当て、論理的に関係づける能力があること
・課題に対しての解決方法が広すぎる場合は、新しい発想を考えてみること

【チームＣ：安全・安心】
・本当に改善が必要な場所を定量的に明らかとする。
・まずは住民の方々と一緒に、同じ目線に立ち、普段から気になる箇所を抽出する。
・のちに、私たち専門家がその箇所に本当に対策が必要であるかアドバイスを行う。
・そのためにも、住民の方とフランクに話せるように継続的なコミュニケーションが重要である。
・少しでも気になった点は掘り下げる（と根幹のより重要な課題が浮かび上がることもある。）

質問６：今回の研修会を通して感想をお聞かせください。（該当する番号を丸で囲んでください）
質問 6-1：今回の研修は、コンサルタント技術を向上するという観点で役に立ちましたか？

①たいへん役に立った（3 人）　②役に立った（1 人）
③あまり役に立たなかった（0）　④その他（0）

質問 6-2：あなたの周りの技術者の方に、来年度の参加を勧めますか？

①積極的に参加を勧める（1 人）　②勧める（3 人）
③あまり勧めない（0）　④その他（0）

質問 6-3：今回の研修は、１泊２日で行いましたが、時間配分はいかがでしたか？

①もっと長いほうがいい（0）　②ちょうどいい（4 人）
③長すぎる（0）　④その他（0）

質問 6-4：その他今回の研修に関する全般的な意見等

○柴北川を中心に地域の方々、共助研の方々の日々の御活動に感銘を受けるばかりでした。
今後は時間が許される限り皆様と共に清掃活動などにも携わりたいと思いました。
本養成が若手技術者とのことでしたが、営業部の若手育成にもつなげさせて頂ければと感じました。

○実施の時期を春先にできると人がもっと集まりそうですね。また、分野の垣根を超えた募集をしてもいいのかなと思います。
先日、建築事務所の視察旅行についていったのですが、視点の違いが新鮮で刺激を受けました。建築事務所の若手がこういう経験をすると面白いアイデアが生まれると思いますし、若手の良い経験にもなると思います。

○普段の業務では、住民の方と直接関わる機会がないため、大変貴重な体験ができました。
事務局の皆様には心よりお礼申し上げます。

○一泊二日という短い時間ではありましたが、貴重な経験をさせてもらいありがとうございました。また別の季節に足を運べばまた違う課題、長谷のいいところが発見できると思いますので今後また訪れさせていただける機会を楽しみにしています。

検討成果発表の一コマ

思い出ナビの写真に、思わず身を乗り出す

（２）その他の参加者の感想

1）チームＡ：地域生活の維持

●研修会に参加して

平素自由気ままな生活をしている者にとって、二日間の研修はまさに重荷を背負って歩くに等しく気が重たかったが、長谷地域活性化のために何か一つでも役立つことが出来ればと一念発起して参加しました。

研修は、「共助研」の皆さんの手際良い指導により、気さくな雰囲気の中、お互いが胸襟を開いて語り合うことが出来たことが何よりも良かったと思います。

議論は多岐にわたりましたが、中心問題はやはり「地域の後継者不足」でした。その解決策は、長谷を愛する人達が一人でも多く住む環境づくりです。

ところが、ここでいつも障壁となるのが、田舎暮らしにつきものの「慣習」という義務です。若者や移住者は、この押し付けを嫌い、自由な生活を送りたいという問題が生じてきます。

これを克服するためには交流の場を設け、いつでも誰でも気軽に語り合う場が必要です。
そこでたどり着いたのが「長谷ギャラリー・カフェ」でした。

私にとっては初めて耳にする言葉ですが、夢と希望が心の底から湧きあがるような、とてもいい響きに聞こえてきます。地域づくりは一朝一夕にはできませんが「長谷ギャラリー・カフェ」の設置に向けて微力を尽くしたいと思います。　　（長谷地域総合開発促進協議会会長：田嶋栄一）

●長谷感想

今後の活動方針を探るための協議をＰＣＭ手法で実施することとなった。

中心課題をどう設定するか、設定次第により議論が拡散しすぎたり、矮小化したりし、具体的なプロジェクト提案に至らないのではないかと云った一抹の不安があったが、心配無用であった。活発な議論をリードした若手技術者２名は中心課題を後継者不足とし、その解決に向けたプロジェクト提案をギャラリー・カフェと導いた。

飛躍があるようにも思えるが意外と妙案ではなかろうかと思う。後継者不足を中心課題とすれば、一般的には雇用創出策等に議論が流れる。勿論、それら意見も多く出たし、全議論の根底にはあったはず。しかし、「教育熱心な長谷」と「義務感」の討議が転換点だったようにある。

前者は、「農業では食えない、都会に出て行け、出て行きたければ勉強しろ」と昔はどの親も云っていたと地元シニアの方々。後者の義務感は、地域活動への参加者が減っていることに対して、「楽しくなければ、義務感では参加しない。楽しくやること、やれるような工夫を」と若手技術者。これらの発言は妙に説得力があり、その後の流れを決したようにある。それだけ、問題の核心をついていたとも言え、改めて有意義な研修会であったと思う。謝々　　（共助研：玉田）

●地縁だけでは難しい“愛郷心”の育成に、新たな試みを！

このチームのテーマは「地域生活の維持」ということで、参加者の関心は生活全般にわたりましたが、中心問題となったのはやはりと言うべきか、「後継者不足」でした。

大分市から比較的近い距離に位置し、通勤等にも大きな不便はないと思われる長谷地区で、何故人口が定着しないのか？

小学校が無くなったことが、地域としての求心力低下に予想以上の影響を及ぼしたようで、それに代わる新たな地域拠点の必要性については、地元の方々はもとより我々外部者も等しく意見の一致するところでした。

ここで、チーム内にＩターン者がおられたことが、斬新なアイデアに繋がりました。学校施設活用等の施設面の提案だけでなく、地縁等による旧来からの地域的な義務感からは解放された拠点が必要だとの議論が進み、老若誰もが気軽に立ち寄って話し合えるカフェがいいね！となりました。

途中参加の市長さんからは、長谷が一体として動くことへの積極的支援の言葉もあって、長谷地域総合開発促進協議会の今後の方向性にもつながる議論ができたように思います。（共助研：波木）

２）チームＢ：環境保全・向上

●長谷地区の自然環境について

柴北川の水質浄化には、合併浄化槽の設置推進が必要です。

鳥獣害対策ではイノシシ・シカ・アナグマ等が多くなり、それぞれに適した対策が必要となってきました。自家用菜園でさえも柵が必要な状況です。私が住む栗ケ畑地区では、電気柵では通用しなくなり金網柵に代えることになり、設置を始めました。自然を守るためには、先ず農地を守らなければならないと話し合ったからです。

里山が荒れてきた、林道が通れなくなった、過疎になった地区に住んでいることが負担になることが多くなってきた等の原因は山林がお金にならなくなったこと、或いは人口が減ってきたことが考えられます。

今回参加した研修会では様々な取り組みが話し合われ、大変参考になりました。

この話し合いで学んだことを私だけのものとせずに、地域の人たちに知らせ、地域の人たちと知恵を出し合い、話し合って住みよい長谷にしていくために努力したいと思います。

（大野川漁協長谷支部長：甲斐正俊）

●地域、若手、シニアそれぞれの持ち味がうまく出せて、実現性の高い提案が

「環境保全・向上」は、少し難しいテーマかと思っていましたが、地域の方々の積極的な発言および「若手技術者・藤塚君」のグループ討議進め方の呑み込みの速さ・カードへの書き出し奮闘のおかげで、「合併浄化槽推進プロジェクト」「アナグマ駆除プロジェクト」および「バイオマス燃料供給プロジェクト」の３つを提案することができました。

この３つのプロジェクトへ至る経緯については、ぜひ本文を参照して頂きたいと思います。途中からでしたが、橋本市長が討議に参加され、木質バイオマス発電の建設が具体化していること等の地域動向に係る最新の情報提供もありましたので、より実現性の高い意見交換・まとめもできたかと思います。

地域の方々、若手技術者、シニアエンジニア（共助研メンバー）そして市長の参加もあり、それぞれの長所・持ち味が上手く出せたとグループ討議となり、達成感もありかつ楽しめました。今後は、ここでの討議結果が実現に活かされるよう、微力ですが尽力させて頂きたいと思います。

（共助研：木寺）

●地元の方の地域に関する観察力に感心

「環境保全・向上」はテーマでしたが、中山間地域がそもそも抱えている課題そのものであることからどのような結論になるか１日目は見当もつきませんでした。

検討を進めていく過程で次々と出てくる問題点さすが地元の方は良く地域を見ていらっしゃると感じました。問題点が出れば原因・結果もあっという間に整理され、地元の方、若手・シニア技術者の連携プレーによりいつの間にか立派なプロジェクトが完成しました。

今後は地域の方をもっと幅広く参加していただきプロジェクト実現に向けて進んでいくことを期待したいと思います。

（共助研：森脇）

３）チームＣ：安全・安心

●研修会に参加して

地元参加者を会員以外から半数は確保しましょう、と役員会で申し合わせましたが、ほとんどが会員となりました。私たちの努力不足であり、共助研の皆様には大変申し訳なく思っています。

研修会では、長谷地区の課題が具体的にあげられ、解決策も提案され、大変参考になりました。常日頃不便とは感じずにいたことが、都市部の人には不便であり危険と感じているということが驚きでした。安全、安心に暮らしていくうえでの新鮮な知識として活かしていけたらいいなあと思います。

長谷地区の危険度マップを早く作成して、各自治区の公民館等に掲示していただくよう自治委員さんにも呼びかけたいと思っています。

初めて長谷に来ていただいた若手の皆さんに、長谷をどのように思っていただけたか知りたいです。率直な感想を聞かせていただく機会が欲しいですね。

研修会以上に「懇親会」は楽しかったですので、新年会に参加していただけたらいいなあと思います。

（柴北川を愛する会：甲斐能美（よしみ））

●普通が当たり前、そこにある危険に気づくことが必要！

このチームに与えられたテーマは、「安全・安心」でした。参加者にこのテーマについての意見を求めたところ、「特に不自由もなく、日々安全で安心な暮らしを営めている」との言葉から始まりました。移動は個人での移動が可能な車で、車で 20～30 分圏内に大分市内や豊後大野市中心部の商業施設があり、大きな災害もない・・・と何ひとつ不自由がないとの印象でした。

このような危機感が薄い中からの出発でしたが、車での移動には安全・安心な道路が必要という意識が芽生え盛り上がった議論になりました。いつも車で通る地域を歩くことで地域の見直しができ、危険箇所だけでなく地域資源の再発見へ繋がっていく事につながる可能性も少し見えたと考えています。地域防災までは辿り着けなかったが、色々なアイディアが出る中、「長谷安全・安心プジェクト」の誕生となりました。

今回は、日程の都合で参加可能な年齢層が限られていましたが、今回生まれたプロジェクトを地域の話題として取り上げていただき、異世代間で意見交換をしていただければ、世代を越えた交流が生まれ、地域の「気づき」がどのように繋がっていくかとても楽しみです。　（共助研：波多野）

●根掘り葉掘りと話を進めて、日常生活での「道」の問題が浮き彫りに

地元の参加者の方から、「長谷は、本当にいいところです。昔は、洪水被害もあったけど、今は、そのような心配もなくなった。安心なところですし、安全なところです。特に、困っていることはありません。街の人から見ると不便でも、慣れてしまえば大丈夫です」と、幸せそうに話されるのを聞いて、本当にいいところなんだなあと改めて思いました。・・でも、それでは、このチームに与えられたテーマでの目的が達成されないので、根掘り葉掘り、いろいろと話を進めるうちに、日常生活での「道」の問題が浮き彫りになりました。

課題が明確になれば、あとは一気に、「安全・安心　道マップづくり」から、「長谷安心安全プロジェクト」まで作り上げることができました。

初日は、木寺実行委員長から、「なかなか議論が具体化しないので心配」とのご指摘を受けましたが、結構、具体的で、かつ、地元の人の力で作り上げることできる提案になったのではないかと思います。比較的少人数のチームではありましたが、充実して、かつ、楽しい時間でありました。

（共助研：矢ケ部）

（３）参考文献　その他

●参考文献

１）（財）国際開発高等教育機構：PCM 手法の理論と応用
２）PCM-1 ガイドブック：PCM　Tokyo グループ、2005 年３月（ネット上より）

（以上、共助研木寺より情報提供）

●４マス自己紹介の進め方

【人数】　20 人ぐらいまでがベスト（大人数になると時間がかかる）
【時間】　用紙配布・説明　　3 分
　　記入実施　　4 分
　　自己紹介（隣同士）3 分
　　自己紹介　参加者 20 人の場合 20×1 分＝20 分ぐらい
　　Total　30 分
【運動量】なし
【隊形】　全員の顔が見える。（円形に座る）
【準備】　特になし
【道具】　A4 用紙　、マジック、クリップボード
【目的・効果】
　　・自己紹介で、お互いをよく知る。
　　・自己紹介をする際に何を話していいのか分からなくならないようにする。
　　・自己開示を容易にする
　　・相手を深く知れる
　　・ファシリテーターも 4 マス自己紹介をさせることで、″本人″と″背景″が結びつくので、名前やニックネームが覚えやすくなる。
【場所】　・旧長谷小学校体育館
　　・椅子を円形に並べる?
　　紙に書くことができる環境が必要（クリップボードの配布?）
【手順】A4 用紙を 4 分割にして、それぞれのマスに、ファシリテーターから出される質問の答えを書き込んでいきます。
　　全員が書き終えたら、参加者は隣の人に自分の紹介を、その紙を見せながら説明します。1 人 1 分 30 秒程度で行い、3 分で紹介し合います。その後紹介を受けた相手の説明を会場全体に向かって行う。それを順番に進めます。
　　※建コン参加者と地元の参加者を向後に事前に配置できた方が良いと思われる。
【ファシリテーターの進行】
≪A4 用紙を配る≫
ファシリテーターも参加者と一緒に行いながら進める
「まずは、A4 用紙を A6 サイズになるように 4 等分に折ります。」
「開いてみてください。」
「A4 用紙の中に４つのマスができました。この１つのマスに１つのテーマについて自分の自己紹介を書いてください。」
（間を置く）
「まず１つ目、左上のマスには「氏名」を書いてください。」
（間を置く）
「２つ目は、右上です。右上は、「ニックネーム」を書きます。」
（間を置く）
「左下には、「建コンからの参加者は、所属及び職業」、「長谷地区の方は住んでいる地区名と職業」を書きます。」
（間を置く）
４つ目が、今日こういうつもりで来たんだという「参加動機」。参加動機というとちょっと堅いかもしれませんが、「自分のマイゴール」のような感じで。

「この研修会が終わったときにはこうなっていたい！という思いで来ました。」ということを書いてもらえればいいと思います。
それでは、皆さんに書いてもらおうと思います。3分間ぐらい時間をとりますので、書き終えた人はペンを置いて待っていてください。
わからないことはありませんか？
書くときには、ペンの太い方で書いてくれるとありがたいな。自分のメモではなく、人が見やすいようにお願いします。（ペンは遠くからみえないので黄色とオレンジ色以外の使用をお願いします。）
約3分後　（　ペンの置き具合などを見ながら　8割ぐらいがかけたところで　）
「もう少し時間がほしい！まだ書いているという人は、どの程度いらっしゃるでしょうか。熱い思いを書かれている方もいらっしゃるでしょうがそろそろ終わりにして下さい。それでは、宜しいでしょうか？」
「自己紹介の仕方を説明します。まず隣の人に自分のプロフィールを説明します。
それをお互いでしあって下さい。
例を示します。3分でお互いのプロフィール紹介をします。一人1分30秒くらいです。□□さんお願いします。□□さんに4マス自己紹介をします。
指さしながら「私は、○○と言います。」
「ニックネームは、△△ちゃんです。小さい頃こう呼ばれていました。」
「所属は、●●株式会社です。」
「今回参加した目的は、若手技術者の方と地域の課題に一緒に取り組み何らかの方向性が探せればと思って参加しています。」
次に□□さんから私へ同様に説明をしてもらいます。特に4マス目は書いていないことも説明していただいて構いません。
それでは、□□さんから私の紹介をしてもらいます。
「私の隣の方は、○○さんです。子どもの頃は△△ちゃんと呼ばれていたそうです。今は呼ぶ人はいないようです。所属は、●●株式会社という会社だそうです。今回参加した目的は、・・・・・・・・だそうです。趣味はサーフィンだそうです。宜しくお願いします。」
というようにしていただきます。それでは、隣の方と紹介しあって下さい。時間は2人で3分です。
・・・・・・・・・・・・・・・・
よろしいですか？
それでは自己紹介を始めます。
こちらの方からお願いします。
・・・・・・・・・・・・・・・・・
それぞれの紹介を受けた人のフォローをファシリテーターが行う。
紹介されていない人はいないですね。
それでは、自己紹介を終わりたいと思います。

例）Ａ４用紙

氏名	ニックネーム
所属	参加した動機

（以上、共助研波多野より情報提供）

三ノ岳なかよしパークから望む 山なみと雲海

「地域課題発見・解決力」養成研修会　成果報告書

編集日　平成２５年　１２月

編集者　九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（(一社)建設コンサルタンツ協会九州支部内))

〒812-0013　福岡市博多区博多駅東 1-13-9　博多駅東 113 ビル　8 階

TEL 092-434-4340　　FAX 092-434-4342

共助研ＨＰ：　http://www.jcca.or.jp/kyokai/kyushu/q-sato/